



1月号 ひだまり

今月のエッセー

気になる数字



一月は私にとって特別な月です。それは、私の誕生日が一月二十七日で、さらには一日前の一月二十六日は道元禪師がお生まれになった日でもあるからです。これだけでも特別感がありますが、そんな私の誕生日の一月二十七日。この「127」の数字が過去に気になる現象を引き起こしたことがあります。

私が大学生の時です。進路で悩んでいた時期のある日の夜。勉強をしていた時に時計を見ると、一時二十七分でした。

(あっ、自分の誕生日だ！)

そんな偶然に、少しばかりほっこりした気持ちになり、その日は就寝しました。

すると、不思議なことにこの日を境に毎日のように、「127」が目につくようになりました。電光掲示板、ニュース番組、など生活の中でふっと目を向けた先にその数字が主張してきます。

そんな状態が一ヶ月近く続いたため、私は次第に恐怖心を抱くようになりました。そこで、父親に話したところ、「精神的に不安定なのか、何か囚われている原因があるのではないか？」と言われ、その瞬間に漠然と思うことができました。

それは、将来の進路で悩み、精神的に追い詰められたことによって、神経質になっていたこと。そして、愛着のある自分の誕生日の数字「127」の頻発に何か意味があると勝手に思い込み、囚われていたのではないかと、ということでした。

(やっと答えが見つかった！)

そんな心境になり、それ以来、「気になる数字(127)」は次第に「ただの数字」へと戻っていったのでした。

結局のところ、私の悩みの原因は、自分の外側にあったのではなく、自分の内側にある鬱積した「こころのモヤ」だったのです。

◆田中仁秀

修行体験記

「境内掃除に憧れて」



修行道場の一日は目まぐるしく、こなすべき務めは法要や参拝者のご案内から事務仕事まで山のように。気は休まることを知りません。それらの務めの中でも清掃、特に境内の清掃は、私にとってひとつの楽しみでした。

修行道場にはいくつもの部署があり、担う務めそれぞれですが、どの部署の生活にも共通して言えるのは、屋内に籠りがちであることです。特に私が典座寮(禪寺の台所のこと)にいた折は、夜明け前から晩まで、休みなく食事の準備をして過ごすので、陽の光を浴びることはおろ

か、その日の天候さえ知らぬまま床に就くこともしばしばでした。

禅寺の修行と言われて「清掃」を思い浮かべる方は多いことでしょう。しかし、私が配属された部署は清掃以外にすべきことが多く、中でも持ち場から離れなくてはならない境内の清掃に、私は殆ど参加することが出来ませんでした。

そんな私にとって、境内の清掃は修行であることは勿論、部署の忙しい日常からわずかの間だけ離れられる束の間の小休止であり、更には美しい陽光を身に浴びられる貴重な時間でもあったのです。

◆田代浩潤

編集後記



明けましておめでとうございます。新年が始まると、一年間の目標を掲げる人がいます。ところが私は、今まで新年を迎え、それをしたことがありませんでした。しかし、今年は何か一つ目標をもって一年を過ごしていきたいと思っています。

さて、どんな目標にしようかなと考えていたら、前々から人に指摘されている自分の欠点が思い浮かびました。それは、人前で話すときに声が小さくなってしまふことです。そこで今年の目標が決まりました。人前で話すときに大きな声で話すことです。皆さんはどんな目標を掲げましたか？

◆國生徹雄

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門
〒一〇五・八五四四
東京都港区芝二・五・二曹洞宗事務庁内
☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



二年度
竹村信彦
たけむらしんげん

『随喜』

私事でたいへん恐縮ですが、先月の十四日に結婚式を挙げました。

私たち夫婦は、二人とも長野県松川町の出身なので、同じ町内にある私のお師匠様のお寺で結婚式を行いました。ありがたいことに、式には私の祖父の兄弟をはじめ、たくさんの親戚が出席してくれました。その賑やかな様子と嬉しそうな祖父の顔を私は懐かしい思いでながめていたのです。

「懐かしい」というのは、私がまだ小さい頃は、お正月になると実家に親戚が集まるのが毎年恒例になっていたからです。全員が揃うと、家の中がとても賑やかで、それ

を眺める嬉しそうな祖父の顔を見るのが私は大好きでした。

しかし、ほとんどが、千葉県や神奈川県など地元から離れた場所で暮らしている親戚ばかりです。歳を重ねるにつれて、車やバスでの移動が負担となり、恒例となっていた賑やかなお正月はすっかり影をひそめてしまいました。

それに加えて、二年前には祖父の五人いる兄弟のうち二人が相次いで亡くなっ

てしまい、「兄弟が集まるのはこんな時だけになっちゃったなあ。」

とお葬式や法事のたびに祖父が悲しそうにつぶやいていたのです。

そんな状況だったので、親戚がお祝い事で楽しく集まれるように、ほとんど身内だけの結婚式を二人で計画しました。久しぶりに賑やかになった家を眺めて、

「こんなに幸せな気持ちになったのは久しぶりだよ、信彦ありがとねえ。」

そう言っただけで涙ぐむ祖父の顔を見て、「いろいろ準備が大変だったけど、結婚式やってよかったなあ」と私たち自身が

幸せを実感することができたのです。結婚式を挙げたことよりも、祖父の幸せそうな顔を見られたことが、何より私自身を幸せにしてくれたのでした。

「他人の気持ちになって、ともに喜ぶ」

仏教では、このような生き方を「随喜」とよびます。自分のことばかりを喜ぶのではなく、相手の喜びを何よりも自分の喜びとする生き方のことです。

思い返してみると、私がこれまで見てきた祖父の姿というのは、まさに随喜の生き様であったように思います。例えば、自分がどんなに着古した服を着ていても、私たちに新しい服をプレゼントしてくれるなど、自分たちのことよりも、私たちがうれしそうにしている姿を何よりも喜んでくれるのが祖父でした。

その背中をお手本にして生きてきた私。そんな二人に少しでも恩返しできればと思い挙げた結婚式ですが、嬉しそうな顔を見ることで、逆に私が幸せな気持ちを分けてもらったのでした。

いろんな仏様

『弥勒菩薩』

今回は、右足を左膝の上に乗せ、右手の指を頬にあてて思案する、いわゆる「半跏思惟」の姿で有名な弥勒菩薩です。弥勒は原語ではマイトレーヤといい、慈悲の仏という意味です。

弥勒菩薩は遠い未来で人々を救うとされる珍しい仏様で、「来世には仏として生まれ変わり、人々を悟りへと導く」ということが約束されています。仏様として生まれ変わった弥勒は、苦しみ迷う人々に仏教の教えを説き示し、苦しみから解放された悟りへと導くのです。

生まれてくるのは今から五六億七千万年後。その間は兜率天という仏の世界から私たちのことを見守っています。弥勒菩薩が一般的な坐禅の姿ではなく、半跏思惟の姿をとっているのは、私たちが修行しながらも見守っている姿を現しているからといわれています。



画像提供：東京国立博物館



◆中野太秀

私の○○自慢



神奈川県 大森海岸にて撮影
(左から竹村、田中、田代。)

『フィルムカメラ』

私の自慢は自身が一番の趣味でもあるカメラです。現在、カメラは計七台所有。その内、五台がフィルムカメラになります。デジタルカメラは写真の現像代もかからず、誰でも手軽に綺麗な写真が撮れます。ゆえに失敗は少なく、たとえ失敗してもすぐに消すことが出来ます。しかし、だからこそ私はフィルムカメラを愛用しているのです。

フィルムカメラはシャッターを一度切っただけで、その像が消えることはありません。失敗してしようと綺麗に撮れていると、その結果に嘘をつくことは出来ないのです。おまけに写真一枚約七〇円の費用…。そのため、図らずもシャッターを切るその瞬間、その一枚と真剣に向き合わされてしまう人の性。「やり直しのきかない人生」を私に淡々と語ってくれる無常で非情な可愛い相棒。皆さんはいます？そんな相棒。◆畔柳公潤